

今後の苺栽培管理について (NO.2)

R8.10

アグリ技研 (株)

1. 電照・草勢維持について (11月～)

電照は「果房の連続性向上と収量増加のため、草勢が適正に維持出来る様に電照時間を調節します。」

- 電照時間の調節は、心葉の展開状況を観察し、株の着果状況や天候から今後の生育を予想して行います。
- 品種や生育で処理時期も変えます、11月上旬を目安に開始します。(60分～)

【電照時間調節の目安】

【心葉展開時の葉柄長等による草勢判断】

草勢	弱	適切	強
心葉の葉柄長	8cm以下	10～12cm	12～13cm以上
心葉の色	濃緑色	緑色	黄緑色
果房の方向	45度以下	45度	45度以上
着果負担	増加	並	減少
予想気温	低温	並	高温
電照時間調整	長くする	維持	短くする

2. 温度管理について

- 生育停滞の場合は、早朝をやや高め(10℃)生育促進を図ります。
- 炭酸ガス処理と日没加温(18～20℃)で転流を促進します。
- 株疲れ、中休み対策にも温度管理を十分に行います。

【果房の生育時温度管理の目安】

頂果の状況	昼間	夜間 (21時～	前夜温 (18時～
1 番果収穫期	25～28℃	6～7℃	10～12℃
厳寒期	25～28℃	6～7℃	18～20℃

3. 施肥管理について

(草勢維持や収量向上のために定期的に施肥します)

- 液肥はN成分で月に2～3kg/10aを3～5回に分けて施用します。
1回に「ウルル18号⇒5～10kg」を施肥
- 根は、収穫開始とともに退化“成り疲れ”となるために発根促進剤として
7～10日毎 「アミクエ⇒5～10kg/10a」を施肥
- 果実肥大促進のために厳寒期からはカリ肥料を多く与える。
5～7日毎 ①「ふとる⇒10kg」又は②「カリっと⇒1kg/10a」を施肥
- チップバーン、硬果、裂果対策にカルシウムの補給。
5～7日毎 「カル元気⇒2～3ℓ/10a」を施肥
- 土壌の通気性改善
15日毎 「フショクフル⇒5kg/10a」を施肥（液肥に混用）
- 先青果や先白果の発生が多い圃場では、施用量を減らすか施用を控えます。
- 厳寒期に向かったの草勢維持にはアミノ酸も豊富で光合成促進の葉面散布。
5日毎 「コラーゲン・ラボ500倍」+「クドグリーン500倍」

4. 水管理について

水管理（pF目標値1.7～1.8）

- 灌水は地温を下げないように、収穫終了後の午前中に行う。（根温20℃前後）
- 灌水は少量多回数で行い、高温管理する場合は、灌水量を増やす。
- 灌水不足の場合は①草勢低下する②心葉の先に葉水が出ない、③葉や果実の艶落ちとなる、④果実と果梗の離れが悪い、⑤通路に亀裂がある。

5. CO₂処理、温度・湿度、光について

「株・成疲れ・中休み対策」にも環境管理の充実

「炭酸ガス濃度は、日中でも450～600ppmの維持と温度と湿度・光線の確保」ビニール被覆後の温度・湿度・CO₂相関関係を考慮してのハウス内管理に努める。

特に「飽差」や「日没加温3時間（18～20℃）夜温は（5～7℃）」を徹底することでより効果は期待出来ます。

* 高温は湿度低下（乾燥気味）で気孔を閉ざして光合成能力を低下させるために高温時には湿度を維持することで生育は良好となります。

◎ 摘花・果作業を行うことで、ゴボウ根（直根）や細根の充実状態を維持しま

すので成疲れ対策にもなります。